

# 感情表出動詞文の分類と語彙

山 岡 政 紀

## 1. 感情表出動詞文へのアプローチ

### 1.1. 問題の所在

例文(1)は、発話者が発話時における発話者自身の感情を、動詞述語のル形終止を用いて表出する表現である。

(1) ああ、腹が立つ。

この場合、①文の意味上の時制（以下、時制意味と呼ぶ<sup>1)</sup>）が「現在」であること、②経験者が第一人称に指定されること、という二つの際立った現象が見られる。①は通常、状態動詞の特徴とされ、述語でのル形終止が「未来」を表す動作動詞と対立している。また、②は命令や意志などのモダリティに見られる人称指定の現象と類似している。このような現象を見せる動詞のことを、「感情表出動詞」と呼ぶことにする。

感情表出動詞は、テンス・アスペクト、モダリティ、人称など、構文意味論上の幅広い範疇に関係し、しかも未解決の問題を豊富にはらんでいる。しかし、それらの議論に入る前に、このテーマへの共通の関心を示してきた先行研究が、何を考察対象としているのか自体が、多少錯綜していることを最初に指摘しなければならない。本稿の第一の目的はそれを整理し、明確にすることである。

### 1.2. 先行研究の問題点

例えば、寺村秀夫は、「動的述語の基本形は一般的に未来の事態を表すが、現在の事態を表す場合もある」とし、「音ガスル」「匂イガスル」などの感覚表現や、「思ウ」「信ジル」「考エル」「困ル」などの思考の表現は、感情形容詞と共通点を持ち、述語基本形では、その感情の主体が必ず話し手自身であると述べている。ここで寺村は、感情表出動詞について、語彙分類としては動的述語の一種と認めており、述語基本形の場合に限って、現在時制や第一人称への人称制限が発生する特殊な「用法」として位置づけている<sup>2)</sup>。

また、高橋太郎は、「『おもう』『かんがえる』『信じる』『気になる』など、考えや思いをあらわす動詞の完成相非過去形が一人称につかわれると現在の動作をあらわす」ことが指摘するが、これも語彙ではなく、用法としての位置づけである。これについて、「この『おもう』は、アスペクト的な意味において、完成相でも継続相でもないのである」としているが、そのことの実証的な考察は行われていない<sup>3)</sup>。

このような用法としての位置づけを与える論考に対し、語彙分類としてくるものもある。例えば、町田健は、「～見える」などの知覚を表す動詞と、「～思う」などの思考を表す動詞を、存在、必要、関係、能力を表す動詞群とともに「状態動詞」の一種として扱っている<sup>4)</sup>。

工藤真由美の場合は、アスペクト対立が有る動詞を〈外的運動動詞〉、アスペクト対立が無い動詞を〈静態動詞〉とするが、思考、感情、知覚、感覚などは、スルとシテイルの対立があるが、継続性の有無だけで対立しているのではないことから、中間に位置づけ、アスペクト対立が部分的に変容した〈内的情態動詞〉としている<sup>5)</sup>。

工藤のように、動詞をアスペクト的特徴から分類しようとすることの淵源は、言うまでもなく金田一（1950）に遡ることができるが、そこでは実はこの種の感情表現については全く触れられていなかった。金田一は気づいていなかったのではなく、敢えて言及を避けたのではないだろうか。というのも、感情を表す動詞の語彙的意味とアスペクト的特徴との間に必然的な関係が見いだしにくいからである。例えば「怒る」のように、意味特徴としては「腹が立つ」と同類と思われるにもかかわらず、述語ル形終止で話者の発話時の感情を表すことができない語彙がある。

(2)\*ああ、怒る。

しかも、他人の感情を描写する構文に用いられた(3)と(4)を見比べてみて、両者のアスペクト的特徴に差異があるようにはほとんど思えない。

(3) 山田次郎は政治家の怠慢に腹が立っている。

(4) 山田次郎は政治家の怠慢に怒っている。

この二例を見る限り、「腹が立つ」は状態動詞（句）で、「怒る」は動作動詞などという分類がありえないことは言うまでもないが、だからといって両者ともに中間に位置づけてすむ問題でもない。「怒る」以外にも「悩む、悲しむ、苦しむ、喜ぶ」など、感情を表してはいるが、ル形終止で話者の感情を表出することができない動詞は少なくない。どの先行研究もこのことを十分に問題にしていない。

結局、用法を整理することと、その用法に用いることのできる語彙を整理するという二段構えでいくしかないのではないだろうか。

改めて、先行研究の問題点を整理するならば、概ね以下の四点に集約されるであろう。第一に、感情表出という「用法」について、どのような種別があるかなど、実態が把握されていない。第二に、感情表出に用いることのできる動詞の語彙が十分に記述されていない。第三に、動詞分類全体の中で整合的に位置づけられていない。ここで意図する動詞分類はやはりアスペクトにおける特徴による分類である。第四に、感情表出用法の「現在時制」や「状態性」の本質がよくわかっていない。

これらは本来一括して議論されるべきものだが、本稿では紙幅の関係上、第一、第二の問題についてのみ考察を行うこととする。

### 1.3. 用法の問題——発話行為論における感情表出行為の位置づけ

問題の現象は、一定の条件下で用いられる一つの特殊な用法として処理する以外にない。この用法は、その発話が「発話時の話者の主観内に私的に表れている何らかの感情を他者に伝達するために言語化する」、という発話の目的・機能がもたらす用法である。この種の問題は、統語論や形態論の領域に関するというより、発話者の意図や話者間の関係といった語用論の領域に属する問題であり、特にオースティン、サール、ヴァンダーベークンらによって考察され、議論されてきた。彼らの論考は一般に発話行為論 (Speech Act Theory) と呼ばれている。それによると、発話という行為 (発音にせよ筆記にせよ) と同時に、どのようなもう一つの抽象的行為が行われているか、ということに対して与えられた概念が、発話内行為 (illocutionary act) である。それは、より単純に考えれば、発話の目的・機能が何であるか、ということでもある。従って、本稿が問題にしている事柄に対する説明に、彼らの知見は実際のところ大いに役立つ。発話内効力は、その性質上、個別言語を超えた、普遍性の高いものであるからだ。

一方、発話の目的が、発話に用いられる文の構造に対してどのような制約を課すかといった問題は、当然のことながら、個別言語の構造によって異なる。

日本語において、感情動詞の語彙的意味は、単に「感情」であって、感情表出という発話の目的を果たすために必要な、「話者の」とか、「発話時の」といった制限的な意味をもともとそなえているものではない。従ってそれは、日本語の構文に一定の条件を課することになる。このことは、次の第2節で示す〈条件A〉の中に反映されている。

また、第2節で最も下位の分類は、発話内行為によるものとなっている。これには【効力】という名称が与えてある。これは発話内効力 (illocutionary force) の略称である。即ち、発話内行為によって伝達される意味と言ってもよい。発話の最終的な意図と言ってもよさそうだが、意図や目的という用語は発話者に内在するものであり、効力は実際に発話が聞き手に届いた時に世界にどのような変化が生じているかを含むものであるという点で、決定的に異なっている。ここでは、これ以上の考察を避けたい。

#### 1.4. 語彙の問題——感情動詞の三分類

感情表出という用法はどの動詞にも等しく適用され得るような生産的な用法ではなく、適用される語彙がかなり制限されており、そのため問題の現象を当該の語彙そのものの特徴のように錯覚しがちである。しかし、既に見たとおり、感情を表すということでは共通しているのに、どうして感情表出用法に使えるものと使えないものとに分かれるのかということについて、説得力のある解答はまだ見出せていない。

本稿では、とりあえず、この特殊な用法の適用範囲を語彙として認める方法を取りたい。まず、話者が発話時の自らの感情を表出する用法が「感情表出用法」である。述語でル形終止となった場合に、文が感情表出用法となるような動詞語彙を(A)「感情表出動詞」と呼ぶ。また、述語でタ形終止の場合に感情表出用法となる語彙もいくらかある。つまり、過去形でありながら意味時制が現在となるという特殊な用法である。この用法を持つ動詞語彙を(B)「感情変化動詞」と呼ぶことにする。工藤(1995)は(A)と(B)の区別については言及している。

そして、ル形終止でもタ形終止でも感情表出用法とならず、しかも語彙的意味としては(A)、(B)と同様の意味特徴を持つ動詞語彙を、感情の動きを客観的に描写する動詞として(C)「感情描写動詞」と呼ぶことにする。先に述べた「怒る、悩む、悲しむ、苦しむ、喜ぶ」などはこれに当たる。(C)を用いて話者自身の感情を表出しようとする場合は、テイル形をとらなければならない。その場合も、人称指定が発生しないため、人称指定による第一人称経験者の省略はできない(文脈や場面などからの省略はあり得る)。(A)~(C)を総称した全体を「感情動詞」と呼ぶことにする<sup>6)</sup>。

(A)、(B)、(C)相互の境界に関してはかなり厳格な峻別が可能だが、動詞分類全体の中での位置づけは、決して単純ではない。語彙的意味のアスペクト上の特徴が、感情表出用法の中で用いられる場合と、それ以外の場合とで異なるからである。

感情表出用法を除外して考えてよいなら、(A)は継続動詞の一種で、(B)は瞬間動詞（または変化動詞）の一種、(C)には両方が混在している。特殊な用法のない(C)については、他の動作動詞との境界線を引くことが厳密には不可能である<sup>7)</sup>。これらの詳細については、稿を改めて論じたい。

〔表1〕は(A)感情表出動詞、(B)感情変化動詞、(C)感情描写動詞の分類を一覧にしたものである。下位分類として四種を立てたが、これは(A)～(C)に横断的に見られる下位分類である。(S)の評価用法は、感情表出用法との性格の違いが顕著である。語彙としては感情描写動詞が用いられているので、用法として扱う。これも詳細は別稿に譲る。

〔表1〕 感情動詞の三分類と下位分類

	1 思考	2 情意	3 感覚	4 知覚	S 評価用法
(A)感情表出 〔I〕+V-ru	A-1思考表出 ～ト(～ク)思う	A-2情意表出 困る	A-3感覚表出 胃が痛む	A-4知覚表出 見える	S-A 評価表出 (～ニ驚く)
(B)感情変化 〔I〕+V-ta	B-1思考変化 ひらめく	B-2情意変化 あきれる	B-3感覚変化 肩が凝る		S-B 評価変化 (～ニ驚いた)
(C)感情描写 I + V-teiru	C-1思考描写 ～ヲ思う	C-2情意描写 怒る	C-3感覚描写 顔がほてる	C-4知覚描写 見る	

左端の欄に記載されている文型表示では、〔I〕は省略可能な第一人称経験者、Iは省略不可能な第一人称経験者(文脈や場面などによる省略は別とする)、V(動詞部)の後は、テンス・アスペクト形式(いずれも異形態あり)を表している。

## 2. 感情表出動詞文の用法の分類と感情表出動詞の語彙

動詞述語文が以下の〈条件A〉を満たせば感情表出行為を遂行するような場合、その述語動詞を「感情表出動詞」と呼ぶ。

—— 〈条件A〉＝感情表出動詞文が感情表出行為を遂行するための条件 ——

- ① 第一人称以外の〈経験者〉名詞句がないこと
- ② 時制形式-ru-が用いられること
- ③ アスペクト形式が無標であること
- ④ モダリティ形式が無標であること(終助詞は付加してもよい)

条件Aを満たさない文中では、感情表出動詞は、感情表出以外の発話内行為に

用いられることになる。しかし、この種の動詞は、その特性から感情表出行為において用いられることが多いことや、感情表出という発話内行為が一つの型を成していることなどから、第一人称に指定された経験者は省略しやすい。また、この主たる用途を念頭において「感情表出動詞」と呼んでいるわけである。今後、別稿にて論じる感情変化動詞、感情描写動詞のことを念頭において、Aという記号を用いる。

## A-1 思考表出動詞文

「思う」をはじめとする思考表出動詞の特徴は、引用節の補文を取ることである。それが条件Aを満たすとき、引用節は何らかの意味で必ず話者の主観が介在したものとなる。ただし、その引用節の内容によって、最終的に生じる効力は多様化する。ここでは四つを挙げておきたい。

### A-1-1 思考表出動詞文の情意表出用法

感情形容詞文（イ形容詞，ナ形容詞を問わない）を補文とし、「と思う」や「と感じる」などで受けると、補文のみの場合と情報量のほとんど変わらない情意表出となる。ただし、記述的である分だけ、いくらか冷静な印象を与える。

省略されている第一人称経験者については、含意されているというしるしに記号（+ [I] Ex）を付す<sup>8)</sup>。

(1) 心から悲しいと思う。 + [I] Ex

(2) 東京の暑さの中で暮している人たちをお気の毒に思います。

+ [I] Ex (青春)

#### —A-1-1 思考表出動詞文（情意表出）

##### 【構文】

[I] Ex ハ + <[I] Ex (+ {対象} ヲ) + 感情形容詞-i/-da-> ト + V-ru

[I] Ex ハ + <[I] Ex (+ {対象} ヲ) + 感情形容詞-ku/-ni-> + V-ru

【語彙】 思う，感じる，……

【効力】 思考表出→情意表出

この場合の【効力】は多層化しており、「思考表出」の体裁をとりつつ、最終的には「情意表出」を遂行していることを示している。

また、A-2 情意表出動詞文を補文としても、経験者の第一人称指定や状態性が打ち消されてしまい、補文の時制意味が現在ではなく未来となる。このとき情

意表出用法にはならず、A-1-2のような主張用法となる。

- (3) ([任意の人称詞] Ex ガ) 腹が立つと思う。 + [I] Ex

#### A-1-2 思考表出動詞文の主張用法

引用節をとって、話者の思考内容を表出する動詞を思考表出動詞とする。「～と思う」がその典型である。ただし、以下に見るとおり、思考内容といっても様々である。

- (4) 江藤一家から一人の法学博士を育てるというのもなかなか意義があると思は思う。(青春)
- (5) それから、それぞれの課で、何ができるか、考えてみることも大切だと思います。 + [I] Ex (女社長)
- (6) それを直せなんたら恥辱この上もないと思う。(葦手)
- (7) 私はこの力を以て己れを鞭ち他を生きる事が出来るように思う。(小さき)

引用節には丁寧表現や終助詞など対人関係的な文要素が入り得ない点で、発話動詞の引用節と異なる。

- (5)' 考えてみることも大切ですよ (言う／\*思う)。
- (6)" 考えてみることも大切だねと (言う／\*思う)。

この例では、命題が真であることを話者の判断として主張しているため、最終的な効力としては「主張行為」を同時に遂行することになる。

#### A-1-2 思考表出動詞文 (主張)

【構文】 [I] Ex ハ + {任意の命題} (ト／ヨウニ) + V-ru

【語彙】 思う、確信する、考える、見当がつく、察する、察しがつく、信じる、推察する、推測する、想像がつく、判断する、見る、わかる、……

【効力】 思考表出→主張

この構文については、(9)との類似から「と思う」をモダリティ形式の一種と考える論考もある (例えば森山 (1990) の注1 など)。

- (9) 考えてみることも大切だろう。

これらは先に述べた条件のもとで、第一人称経験者や非過去時制などの諸要素が複合して、全体としてモダリティ意味が発生している。「ト思う」をモダリティ形式の一種と考えることは、その形式だけにモダリティ意味の所在を限定することになり、厳密ではない。

### A-1-3 思考表出動詞文の意志表出用法

同じ「と思う」でも、引用節にモダリティ形式が全く入らないわけではない。  
第1人称の動作主を指定しておけば、ヨウやタイを入れることができる。

(10) 第一回の幹部会議を開きたいと思います。 + [I] Ex (女社長)

(11) 私たちの手紙のやりとりは、これを最後にしたいと思います。(錦繡)

(12) これからは東北の田舎町の、十六七の青二才どもを相手にして、彼等の  
良き友となり良き教師となって、静かに生きて行こうと思う。

+ [I] Ex (青春)

(13) 私は、山本五十六をめぐるたくさんの「もしも」の中の、ごく小さな一  
つの「もしも」からこの物語を始めようと思う。 + [I] Ex (山本)

この場合は、いずれも話者自らの未来の行為への意志表出という、表明型  
(commissives) の効力を持つことになっている。

#### A-1-3 思考表出動詞文 (意志表出)

【構文】 [I] Ex ハ + {[I] Ag + V-yoo/-tai} ト + V-ru

【語彙】 思う, 考える, 希望する, 願う, ……

【効力】 思考表出→意志表出

### A-1-4 思考表出動詞文の助言・忠告用法

この構文では、動詞命令形を用いたいいわゆる命令文を補文とすることはできな  
いが、助言の「タホウガイイ」、「トイイ」、忠告の「ベキダ」等が第二人称の動  
作主とともに用いられることで命令文に準じる効力をもった文については、この  
構文の補文とすることができる。

(14) すぐにでも出かけたほうがいいと思う。 + [I] Ex + [II] Ag

#### A-1-4 思考表出動詞文 (助言・忠告)

【構文】 [I] Ex ハ + {[II] Ag + V-タホウガイイ/ベキダ} ト + V-ru

【語彙】 思う, 考える, ……

【効力】 思考表出→助言・忠告

### A-1-5 思考表出動詞文の依頼用法

文末が「テホシイ」、「テモライタイ」となる文では、第一人称の受益者 (Bf)



と第二人称の動作主 (Ag) が含意されれば、依頼の効力が発生する。この場合もやはりこの構文の補文とすることができる。ただし、直截さが薄れ、いくぶん婉曲的になっている。

この依頼用法、及び、A-1-4 の助言・忠告用法は、最終的には、相手の未来の行為を指し示し拘束しようとする指導型 (directives) の効力が発生している。

- (15) 故に、甲神部隊員のうちでも我が小島村出身者を一人でも多く救出し、やがては来るものと覚悟せねばならぬ日に於ける村の防衛に万全を期せらるるよう、救出救護して帰って来てもらいたいと思う。

+ [I] Bf-Ex + [II] Ag (山本)

#### A-1-5 思考表出動詞文 (依頼)

【構文】 [I] Ex ハ + { [I] Bf + [II] Ag + V-テホシイ / -テモライタイ }  
ト + V-ru

【語彙】 思う、望む、期待する、……

【効力】 思考表出 → 依頼

## A-2 情意表出動詞文

### A-2-1 情意表出動詞文の情意表出用法

思考動詞のように、補文の意味によって感情表出を行ったりということがなく、純然とその動詞の語彙的意味によって感情表出を行う、という点で感情表出動詞の中では最も標準的と言える語彙を「情意表出動詞」と呼ぶ。情意表出動詞は語彙が豊富であり、語構成ごとに分けて示したい。

- (1) ところが、「こりゃあ困る。( + [I] Ex) これはいかん」と云って僕に突き返した。(黒い雨)
- (2) おほつかないなんて、いっちゃ困るよ。 + [I] Ex (死者)
- (3) バスは時間が不定期で困るよ。 + [I] Ex (女社長)

#### A-2-1 a 情意表出動詞文 (単独)

【構文】 [I] Ex ハ + { 対象 } ニ + V-ru

【語彙】 困る、しびれる、むかつく、じれる、照れる、白ける、妬ける、めげる、清々する、……

【効力】 情意表出

また、情意表出動詞には、慣用的な成句表現が多いのも特徴である。感情表出

動詞の中にはガ格をとるものも少なくないが、動詞の尊敬語化や、再帰代名詞の先行詞になるなど、主語が持つ特性は一切そなえていない。これらは全体で一つの語彙的意味を有する一語と捉えるべきである。以下、効力については同じく情意表出なので省略する。

(4) 「わしゃあ、むらむらと腹が立つ」 + [I] Ex (黒い雨)

(5) 「本当にいやなはずらね。嘘と分かっていても腹が立つわ」

+ [I] Ex (女社長)

—A-2-1b 情意表出動詞文〈成句〉—

【構文】 [I] Ex ハ+ {対象} ニ／ガ+ V-ru

【語彙】 頭に来る、怒り（嫌悪感）を覚える、関心（興味）がある、気が立つ、気が咎める、気が晴れる、気が滅入る、心が痛む、心が和む、癢に障る、鳥肌が立つ、腹が立つ、はらわたが煮えくり返る、虫酸が走る、胸踊る、胸が高鳴る、良心が痛む、……

格については、成句で用いられている格助詞がガ格の場合、感情の対象は二格で表示され、成句で二格が用いられている場合には、反対に感情の対象は二格で表示されるという法則が見られる。これはそれぞれの格の特性とはほとんど無関係のようである。

(6) あの言い方が癢に障る。 + [I] Ex

(7) あの言い方に虫酸が走る。 + [I] Ex

擬態語サ変動詞が多いのも情意表出動詞の特徴である。

—A-2-1c 情意表出動詞文〈擬態語〉—

【構文】 [I] Ex ハ+ {対象} ニ+ V-ru

【語彙】 イライラする、ウキウキする、ウンザリする、カリカリする、ゾツとする、クラクラする、ゾクゾクする、ドキドキする、ハラハラする、ムシクシクする、ヒヤヒヤする、フラフラする、ムカムカする、ムズムズする、ワクワクする、……

表出される情意の語彙的意味が、動詞ではなくガ格名詞句によって表現され、動詞は形式動詞「スル」のみとなるような表現もある。これによって表現される情意は、話者の内部で生じた内的経験（多くの場合、生理的な変調）を表す語彙群だが、そのすべてが、この構文に使えるわけではないことは、(9)が非文であることからわかる。

(8) 頭痛がする。 + [I] Ex

(9)\* 歯痛がする。

#### A-2-1d 情意表出動詞文〈スル〉

【構文】 [I] Ex ハ+ (任意の句) {内的経験} ガ+su-ru

【語彙】 {悪寒, 寒気, 頭痛, 吐き気, 耳鳴り, 胸騒ぎ, 目まい, ……} がする

#### A-2-2 情意表出動詞文の主張用法

直前にスル型の情意表出動詞について考察したが、これとほぼ同じ構文を持っていながら、ガ格によって示される内的経験が、しばしば命題を補文とする名詞節を構成する場合がある。補文標識として、トイウ、ヨウナなどが介在することもある。この場合、A-1-2「思考表出動詞の主張用法」とほぼ同じ発話内行為を遂行する。ただし、思考表出動詞の場合よりも、直観に依存する度合いがいくらか強い。

(10) かなり長時間を要したような気持がする。 + [I] Ex (黒い雨)

(11) 椅子に座って、部屋の中を見渡すと、入り口の所で、立って見たのと、また違う部屋のような気がする。 + [I] Ex (女社長)

(12) ここでは、宇都宮までは、何をしたって安全でしかないという気がする。  
+ [I] Ex (マルス)

(13) 第一、涼しいところで、さぞや気持ちよく勉強できるだろうと、羨ましい気がします。 + [I] Ex (青春)

(14) 近いうちに地震が起きる予感がする。 + [I] Ex

#### A-2-2 情意表出動詞文(主張)〈スル〉

【構文】 [I] Ex ハ+ {任意の命題+内的経験} ガ+su-ru

【語彙】 {感じ, 気, 気持ち, 予感, ……} がする

【効力】 情意表出→主張

#### A-2-3 情意表出動詞文の対人的態度表明用法

ここに挙げるのは、広い意味では情意表出行為を遂行しているのだが、単なる独白的な情意表出ではなく、相手に対する情意を積極的に伝達する発話内行為となっている。これを「対人的態度表明用法」と呼ぶことにする。

(15) 「ありがとう！ 感謝するわ」 + [I] Ex (女社長)

情意の対象が相手ではなく第三者の場合は通常の独白的な情意表出となる。(16)の場合は、さらに相手への皮肉という間接的効力が発生した特殊例である。

(16) 「全く、お前に給料を払っている会社に同情するよ」

+ [I] Ex (女社長)

#### A-2-3 情意表出動詞文 (対人的態度表明)

【構文】 [I] Ex ハ + [II] Gニ／ヲ + V-ru

【語彙】 疑う、恨む、恩に着る、感謝する、期待する、軽蔑する、信じる、信用する、尊敬する、同意する、同情する、評価する、憎む、……

【効力】 情意表出→疑惑・感謝・期待・信頼・尊敬・評価等、対人的態度の表明

#### A-3 感覚表出動詞文

A-2の情意表出動詞と似ているが、話者の肉体の上で生じる内的経験に対する志向性が強く、外的対象への志向性が弱く、そのため語彙的意味が身体的・直接的で、人格や主観による把握という意識が弱い点が特徴である。それでも一応、外的対象を表示できる構文を持つもの②と、持たないもの①とがある。①の場合、強いて外的対象を表示する場合には、格助詞句「～ノセイデ」などを用いなければならない。②は感情形容詞の構文に近い。

- |                     |          |       |
|---------------------|----------|-------|
| (1) 傷跡が痛む。          | + [I] Ex | } ……① |
| (2) 歯がうずく。          | + [I] Ex |       |
| (3) 神経痛でひざがズキズキする。  | + [I] Ex |       |
| (4) 近所の工事現場の音が頭に響く。 | + [I] Ex | } ……② |
| (5) 靴底が足の裏にチクチクする。  | + [I] Ex |       |
| (6) 注射が痛い。          | + [I] Ex |       |

#### A-3 感覚表出動詞文

【構文】 ① [I] Ex + {肉体部分} ガ + V-ru (〔対象〕 ノセイデ)

② [I] Ex ハ + {対象} ガ + {肉体部分} ニ + V-ru

【語彙】 ①痛む、うずく、しびれる、スツとする、ふるえる、

{歯、骨、関節など} が～ガクガクする、キリキリする、ズキズキする

{胸} が～ドキドキする、ムカムカする、{頭} が～クラクラする、ガンガンする、{目} が～チカチカする、ショボショボする、{背筋} が～ゾクゾク

クする, {鼻} が〜グズグズする, {腹} が〜ゴロゴロする, {皮膚} が〜カサカサする, ヒリヒリする, チクチクする, ムズムズする, ……

② {音} が {頭} に〜響く, {水, 薬など} が {目, 歯, 皮膚} に〜しみる, ……

【効力】 感覚表出

#### A-4 知覚表出動詞文

##### A-4-1 知覚表出動詞文の知覚表出用法

意味的に感覚表出動詞に類すると思われる語彙として, 聴覚, 視覚, といった知覚を表す動詞群がある。

(1) 妙な音が聞こえる。 + [I] Ex

(2) 遠くに山が見える。 + [I] Ex

これらの知覚は公共性が強く, 第一人称経験者を明示するためには属性形容詞と同様に個別化の二格を用いる必要がある。

(3) 私には妙な音が聞こえる。

この場合, 「私は」を補うと, 知覚表出の文ではなく, 人物の属性 (潜在的な能力) を表す可能動詞文の意味が強くなる。

(4) 私は妙な音が聞こえる。

以上のように, この種の知覚を表す用法においては, 情意表出とも感覚表出とも異なる構文特徴を有するので, 知覚表出用法として, これに用いられる動詞を知覚表出動詞とする。形容詞分類における属性形容詞に対応するが, 一方で, これまで見てきたのと同様, 〈条件A〉のもとにこの知覚表出行為を遂行することになりはなくなり, 感情表出の下位分類とみなすことができる。

##### A-4-1 知覚表出動詞文 (知覚表出)

【構文】 [I] Ex ニハ+ {対象} ガ+ V-ru

[I] Ex ニハ+ {命題} (ト/ヨウニ) + V-ru

[聞こえる, 見える, のみ]

【語彙】 聞こえる, 見える, わかる, 目につく, 鼻につく, ……

【効力】 知覚表出

##### A-4-2 知覚表出動詞文の描写用法

嗅覚を表出する「におう」も意味的には知覚表出動詞に含まれる。

(5) 腐った野菜がにおう。

しかし、「におう」は「見える、聞こえる」と違って、潜在的能力を表さないため、「私は」を補うと非文となる。

(6)\*私は腐った野菜がにおう。

さらに、サ変動詞系の知覚表現のうち、「音がする、味がする、臭いがする」や触覚を表現する擬態語「ザラザラする、ベトベトする、チクチクする」、嗅覚を表現する擬態語「プンプンする」などは、二格を用いてもなお、経験者を表現できない。

(7) かあアんという音がして、きなくさい匂がする。(黒い雨)

(8) ドアの前まで来ると、中からザワザワと人の話し声がする。(女社長)

(9)\*私には人の話し声がする。

経験者は決してないわけではなく、第一人称経験者に相当する話者自身、即ち経験者の存在が〈条件A〉の①を満たしていることは間違いのないのだが、言語表現としては第1人称経験者は、省略ではなく完全に潜在化している。ここでは、客観世界の現象を描写する発話内効力が発生しているので、これを描写用法としてよいと考える。

—A-4-2a 知覚表出動詞文 (描写)—

【構文】 {対象} ハ／ガ＋V-ru

【語彙】 におう、鼻をつく、

ゴワゴワする、ザラザラする、ジメジメする、スベスベする、チクチクする、ツルツルする、ヌルヌルする、ネトネトする、ネバネバする、ベタベタする、ベトベトする、ムンムンする、プンプンする、……

【効力】 知覚表出→描写

—A-4-2b 知覚表出動詞文 (描写) 〈スル〉—

【構文】 ( {対象} ハ ) ＋ ( 任意の句 ) ＋ {知覚表象} ガ＋V-ru

【語彙】 {味、音、香り、感じ、気配、声、手触り、匂い、……} がする、

【効力】 知覚表出→描写

これらとA-2-1d, A-2-2のスル型の情意表出動詞文と、形式は類似しているが、その感覚・知覚の内容が、発話者自身の内側で生じるものとみなすか、発話者の外側の現象の知覚である（つまり、公共性が高い）とみなすかの違いが、両者の構文上の違いに反映していると考えられる。

以上の例から、知覚表出動詞が表すのは、先に挙げた聴覚、視覚に、嗅覚、味覚、触覚も加えて、五種の知覚の全般に渡る。

感覚表出動詞としても知覚表出動詞としても用いられる特殊な動詞として「チクチクする」が挙げられる。(10)は肉体部分をガ格で表示する、感覚表出動詞である。一方、(11)は外的対象に対する触覚の表現であり、知覚表出動詞である。

(10) 足の裏がチクチクする。 + [I] Ex

(11) 靴底がチクチクする。

(10)は、(12)のように第一人称の経験者を表現できるが、(11)では(13)が非文となり、(14)のように個別化の二が必要となる。

(12) 私は足の裏がチクチクする。

(13)\*私は靴底がチクチクする。

(14) 私には靴底がチクチクする。

この点に関しては、知覚表出動詞文は形容詞文の分類における属性形容詞文に対応する構文的特徴を有していると言える。

また、感覚表出動詞と知覚表出動詞はこの「チクチクする」などの若干の例外を除き、異なる語彙を有している。しかしながら、その意味素性は実は共通しているのではないかということが、その例外である「チクチクする」から図らずもうかがえる。つまり、対象格が肉体部分＝内的対象ならば感覚表出動詞、外的対象ならば知覚表出動詞、というように、対象格を自己内外のいずれに帰属させるかがその動詞文の構文的特徴に反映することになる。

### 3. まとめ

本稿は、用法の分類・語彙の記述それ自体が目的なので、特別な結論等はない。今後引き続き取り組んでいく課題として、①(B)感情変化動詞、(C)感情描写動詞についての記述、②感情表出全般にわたる、テンス・アスペクト、モダリティ、人称などについての総合的研究、③それを動詞分類全体の中でどう位置づけるか、④感情形容詞文との相関など、今後詳しく考察して参りたい。

#### 【注】

- 1) 日本語研究では、あらゆる文法範疇を議論する上で、個々の形態素が有する意味と文または節の単位で生じる意味を厳密に区別すべきだと考える。例えば、印欧語において、名詞の人称範疇のパラダイム上にある諸形式の一つ一つが、第一人称・第二人称・第三人称という意味上の人称の区別と厳密に対応しており、文中でも固定されている。しかし、日本語では人称代名詞の種類自体も格段に多く、しかも、固有名詞、親族名称、職

名等をそのまま人称詞として用いることができる。そのような場合、人称代名詞は形態素として個々に固有の意味を有しているが、人称を表示する形態素が文中に全くないのに文全体としては「人称意味」が含意されていたり、あるいは当該発話において、本来の形態素としての意味とは違う「人称意味」を持つこともあり得る。同様の考え方により、時制範疇については、時制形式とその意味と異なる次元で、文（節）の「時制意味」があると考えられる。時制形式の意味は、文（節）の時制意味を構成する要素に過ぎない。

- 2) 寺村 (1984) p. 104.
- 3) 高橋 (1985) pp. 64~65.
- 4) 町田 (1989) pp. 27~35.
- 5) 工藤 (1995) p. 45. しかし, p. 71では内的運動動詞として、外的運動動詞とともに運動動詞の下位分類とすることも可能だとしている。要するに位置づけが定まっていないということである。
- 6) 感情動詞という呼称は先行研究において必ずしも定着した呼称ではない。他に、堀川 (1992)、吉永 (1997) などでは「心理動詞」という呼称が与えられている。筆者は形容詞における感情形容詞と属性形容詞の対立は、動詞の中にもパラレルに観察することができると考え、この呼称を用いた。
- 7) 例えば、「笑う」は感情と言えるか、むしろ動作ではないか、というような議論は、「感情」という意味特徴の認定に依存するものだからである。
- 8) 効力の一部として伝達され、形式に表れていない名詞句の記述に、ガ格やニ格といった形式格を用いるのは適切でないと考え、意味役割によって記述することにする。本稿で用いたのは、Ex=経験者 (Experiencer), Ag=動作主 (Agent), G=目標 (Goal), Bf=受益者 (Beneficiary) の四つのみである。

#### 【参考文献】

- 金田一春彦 (1950) 国語動詞の一分類『言語研究』15 日本言語学会 48-63
- 草薙 裕 (1994) 日本語における非過去形のテンスとアスペクト『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』三省堂 119-133
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 杉本和之 (1996) 「思う」の統語論的、語彙的特徴『中京国文学』第十五号中京大学国文学会 (1)-(12)
- たかきかずひこ (1997) 対立する形にみえる慣用句の意味(1)『日本文学研究』第三十六号大東文化大学日本文学会 196-178
- 高橋太郎 (1983) スルともシタともいえるとき『金田一春彦博士古稀記念論文集』三省堂 (高橋太郎 (1994) 『動詞の研究』むぎ書房 166-187)
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』(3.2.4 基本形が現在の事象を表す場合) くろしお出版 99-104
- 堀川智也 (1992) 心理動詞のアスペクト『北海道大学言語文化部紀要』21 187-202
- 前田富祺 (1996) 感性動詞語句とは『日本語学』第十五卷第三号 明治書院 4-9
- 町田 健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク
- 森山卓郎 (1983) 動詞のアスペクチュアルな素性について『待兼山論叢』17文学篇 1



- 森山卓郎 (1990) モダリティ『日本語学』第九巻第十号 明治書院 83-89  
吉永 尚 (1997) 心理動詞の意味特性による分類と人称性 日本語教育学会研究集会レ  
ジメ  
LEECH, G. N. (1983) Principles of Pragmatics: Longman  
MAY, J. L. (1993) Pragmatics An Introduction: Blackwell  
SEARLE, J. R. (1969) Speech acts: Cambridge University Press  
SEARLE, J. R. (1979) Expression and Meaning: Cambridge University Press  
SEARLE, J. R. and D. VANDERVEKEN (1985) Foundations of Illocutionary Logic:  
Cambridge University Press  
VANDERVEKEN, D. (1990) Meaning and Speech Acts Vol. 1: Cambridge University  
Press

【用例出典】

- (青春) 石川達三「青春の蹉跎」  
(女社長) 赤川次郎「女社長に乾杯！」  
(葦手) 石川淳「葦手」  
(マルス) 石川淳「マルスの歌」  
(小さき) 有島武郎「小さき者へ」  
(錦繡) 宮本輝「錦繡」  
(山本) 阿川弘之「山本五十六」  
(死者) 大江健三郎「死者の奢り」  
(黒い雨) 井伏鱒二「黒い雨」

いずれも、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』を利用した。